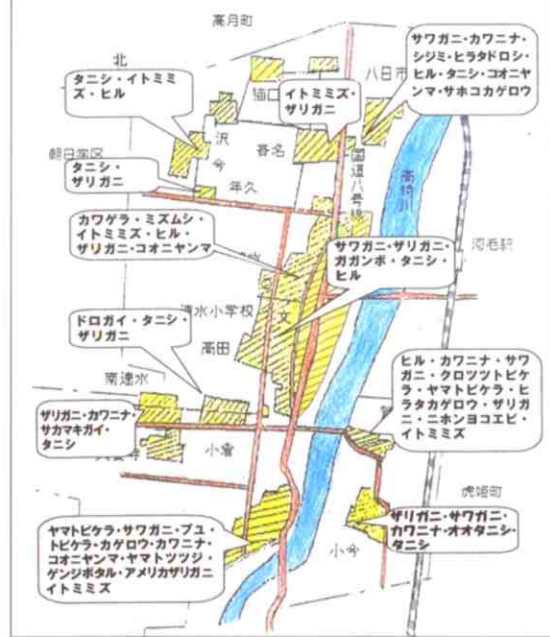


水生生物調査結果



▲水生生物調査結果

指標生物による水質調査



▲指標生物による水質調査



▲自分たちの身近な川を調べる子ども達 (水生生物による水質調査)

21世紀は「水」の世紀

“水の惑星”の恵みを次代に引き継ぐために

第3回世界水フォーラム開催

3月16日から23日、京都・滋賀・大阪を舞台に第3回世界水フォーラムが開催されます。世界の人口の半分が不衛生な水環境のもとにおかれ、水不足や洪水被害の増大など世界各地で水の問題が深刻化しています。世界の水問題を解決するために、水に関わるあらゆる分野の人々が世界中から集まり、分野を超えて知恵や経験を共有する場、それが「世界水フォーラム」です。21世紀の世界の水問題についてまとめてみました。(第3回世界水フォーラム事務局・資料より)

地球人口の約半数が水不足に直面!

地球の別名は「水の惑星」。たつぷりと水があるように思えますが、実はその97.5%が海水であり、淡水は残りの2.5%しかありません。しかも、その大半は氷や地下水として存在するため、人間が容易に使える水は全体のわずか0.01%にしか過ぎません。

2000年に60億人を突破した世界の人口はその後増え続け、2025年には約80億人に達すると予測されています。この人口急増や産業の発展による水利用の増加、地下水の枯渇、水質汚染、地球温暖化などの影響で、世界の水問題が一段と深刻な状況になりつつあります。国連事務総長の報告書では「2025年までに世界の人口のほぼ半分にあたる35億人が水不足に直面する」と警告しているほどです。

一方で世界的な異常気象が進み、洪水や暴風雨が頻発しています。自然災害の被害者の三分の二は洪水によるもので、2002年世界の洪水被害は80カ国1700万人以上が被災、死者300人以上、被害面積はオーストラリアの国土面積にほぼ等しい800万km²、被害総額300億ドル以上に達しています。(世界気象機関・2002年8月29日発表資料より) また水の汚染や環境変化で多くの淡水生物が種の絶滅の危機に瀕しており、水は地球環境全体の問題になっていきます。

世界の水を使っている日本

「湯水のごとく」の言葉に象徴されているように、日本は、一見、水不足とは縁が薄いと思われがちです。

確かに年間降水量は1700mmと世界平均の倍もあります。しかし、人口が多く、一人当たりの降水量は世界平均の約四分の一にすぎません。それに日本では雨が梅雨と台風の時節に偏っているうえ、山地と海が近く、河川は短く流れが急なのが特徴。陸地の川にゆったりと水を保つことができず、雨水は短時間で海に流れてしまうため安定利用が難しいのです。昔、ヨーロッパの技術者が日本のある川を見て、「これは川ではなく滝である」と言ったのはまさに象徴的です。

そのような貴重な水を、昔から「瑞穂の国、水は天からの授かりもの」として、稲作に大量に使用してきました。それだけではありません。わが国は多くの食糧を輸入することによっても世界の水を大量に消費しています。日本の食糧自給率はわずか40%。60%の食糧を海外に依存していますが、それを作るにも水が必要だからです。

例えば、豆類や麦類は栽培のために「食べる量の100倍の水」が必要です。牛肉に至っては700倍の水が必要となります。わが国が輸入する食料をすべて水に換算すると年間約438億m³に達すると言います。水は限りあるもの、地球を循環している資源です。うまく使えば永久に活用できる「天からの宝物」。それが今、危機に瀕しています。これを宝物のまま次の世代に引き継ぐために、私たちは今何をなすべきなのか。国境、人種、政治の壁を超えてみんなで真剣に考え、行動に移すときにきているのではないのでしょうか。

湖北町立連水小学校の「ふるさと学習」大切な川を守ろう

校区に高時川が流れる連水小学校では数年前より自分たちの地域のことを調べる「ふるさと学習」を進めてきました。平成14年度、5年生は「ふるさとの川調べ」(総合的な学習)を通じて、地域の水環境を調べ、地域の方や祖父母の方からも教えていただきました。それらを受け、自分たちの生活を見直し、今ある川の美しさを守っていくために、ごみ拾いや川掃除、ポスターや看板の設置などを行いました。また、全校でも「リサイクル活動」や「クリーン作戦」等、自分たちができることを話し合い実行しています。3月21日には、5年生の代表児童が第3回世界水フォーラムのポスターセッションに参加します。



◀ふるさとの川を守るために、今、私たちができること

湖北の桑酒、それは名水の郷の証



高時川流域は滋賀でも有数の名水の郷。昔から桑酒が作られてきたことがそれを物語っています。良質の米、養蚕の原料である桑の葉、きれいな水の3つがそろわないと作れない酒だからです。湖北の産業の米作や酒造はもちろん養蚕製糸も水質に大きく左右される産業です。「昔は余呉から木之本にかけて酒蔵が10数軒もありました。それも今は2軒だけ。山林の保水力低下とポンプの登場でみんなが汲み上げるようになって水量が減ったのも一因でしょう。米を洗うだけでも酒の100倍以上の水を使いますからね。近江のモチ米と麴と桑の葉を独特の方法で焼酎に浸けこみ、伝統のみりん製法によってつくる桑酒です。石灰分を含み気のない伊吹山系の井戸水が酒の味を引き立ててくれます。この伝統の風味を守る...それは湖北の水を守ることだと思います。」



▲山路ひろ子さん (やまじ ひろこ) 彦根生まれ、昭和26年より湖北に住み、家業に従事し、現在に至る。

(木之本町の山路酒造・山路ひろ子さん)

